



北海道大学大学院

農学研究院

野口伸教授

人気小説「下町ロケットヤタガラス」(池井戸潤著)の、無人トラクターの開発者「野木教授」のモデルとなり、テレビドラマ化のときには技術監修に携わった野口教授。小説さながらにスマート農機を開発し、第一線で活躍する下関出身の野口教授をご紹介します。

**農業の課題を
解決するために
誰もやっていない研究を**



▲オペレータ1人でロボットトラクターを3台動かすことができる協調作業システム。

野口教授は北海道で生まれ、2歳から下関で育ちます。豊浦高校に進学後、生まれ故郷で農業の勉強をしたいと思い、北海道大学農学部に入學。物理系が好きだったので、大学では農業機械に携わるようになりました。

当初、農業ロボットが動くところを野口教授が人に見せると「こんな誰が使うんだ。人間が作業しないと意味がないんだから」とよく叱られていたそうです。大学の助手のときには、研究成果もないので、自分の給料を使って研究費を

「誰もやってない研究をすることになりがいを感ずます。自分の技術が少しでも使われるとうれしく思います」と野口教授は話します。

スマート農業の技術を下関で生かすには

野口教授に下関が農業で、他の産地に勝つために必要なことを伺いました。

「特徴を出すことが必要だと



アグリみちびき未来塾

Agriculture School

未来塾は、下関青年会議所と市内で唯一農業課程がある、山口農業高校西市分校の生徒たちとの取り組みです。「この取り組みを通じて農業の未来をしっかりと考え、下関市のまちづくりに貢献したいと考えています」と下関青年会議所山口大志理事長は思いを語ります。

●スマート農業ほ場見学・体験



5月、西市分校の生徒は、スマート農業を取り入れ、ネギなどを栽培している安岡の新谷庄治さんのほ場を見学。水分量などのデータの活用方法や、新谷さんの「データに基づいた見える化を進めて、農業の可能性を広げたい」という農業への熱い思いを聞きました。

●発表



西市分校の生徒は、下関青年会議所と一緒に、農業についてのワークショップを重ねました。そこで得た知識や経験をまとめ「下関市の農業の現状と課題」「農業の未来」について発表を行い、スマート農機の活用や、農機のシェアなどについて提言しました。

▶▶ 発表や講演会はこちらから ▶▶

西市分校の生徒の発表や、野口教授の講演会の内容は、YouTube動画で。
(下関青年会議所作成)



▲7月に「農業を通じたまちづくり」と題して、野口教授は下関でアグリみちびき未来塾の講演をしました。多くの市民が、最先端の農業技術の話に聞き入っていました。



▲ロボットトラクターが、畑の中を自律的に移動しながら、収穫ハンドを使って収穫します。「AIで成熟したカボチャだけを識別し、傷をつけないで収穫できます。今後、キャベツやスイカなどに展開するつもりです」と野口教授。

思います。そのためのポイントが2つあります。1つ目は、下関に古くからある農産物をブランド化し、下関の地名を付けて売り出すこと。2つ目は、いかに安く、大きなロットで、地域をあげて生産していくことができるかです。下関は知名度が高く、強みがたくさんあるので、他の産地に勝負可能性は十分あると思います。実証して成功事例を作ることが重要です」

スマート農業技術のこれから

スマート農業を進めるに当たって大切なものは何でしょうか。「スマート農業の中心に

いるのは人間で、農業は文化なんです。何千年と人がかわってきた産業で、効率だけはありません。収穫や、食べたときの感動があります。重要なところは人が働いて、疲れるなどというところだけロボットがサポートすることが大切だと思います。スマート農業の、データを利用して短い時間で儲けるようにできる技術や、軽労化する技術は進歩し、機器も安くなってきました。皆さんには、スマート農業に関心をもって、見てもらいたいと思います」と野口教授は話してくれました。

これからのスマート農業の進展から目が離せません。

編集後記

- 下関の活動的な大先輩のお話を伺い、このままではダメだと一念発起。早起きと筋トレを始めました！ が、挫折の日々です。(ひ)
- 初めてプロのキックを体感。しばらく左腕がじんじんしていました。その威力もさることながら、キックのフォームが美しい。(み)
- 講演者の共通事項に、スマート農業は万能ではなく、「人間の力」や「コミュニティの協働」があった点が印象的でした。(に)